



## 第4回松山大学図書館書評賞表彰式

第4回松山大学図書館書評賞の受賞者が2004（平成16）年12月15日に決定、表彰式を2005（平成17）年1月14日に行いました。受賞者は以下の通りです。

- |            |    |    |    |    |  |
|------------|----|----|----|----|--|
| ○最優秀書評賞    | 1名 |    |    |    |  |
| 人文学部社会学科3年 |    | しお | た  | あき | と  |
|            |    | 塩  | 田  | 明  | 人  |
|            |    |    |    |    | (2)  |
|            |    |    |    |    | 『戦場カメラマンが書いたイラクの中心で、バカとさげす』<br>(橋田信介著、アスコム)            |
| ○優秀書評賞     | 2名 |    |    |    |  |
| 法学部法学科     | 3年 | やま | した | さ  | や  |
|            |    | 山  | 下  | さ  | や  |
|            |    |    |    |    | か  |
|            |    |    |    |    | (初)  |
|            |    |    |    |    | 『ビタミンF』<br>(重松清著、新潮社)                                  |
| 法学部法学科     | 3年 | やま | だ  | み  | ゆ  |
|            |    | 山  | 田  | み  | ゆ  |
|            |    |    |    |    | き  |
|            |    |    |    |    | (初)  |
|            |    |    |    |    | 『リトルターン』<br>(ブルック・ニューマン作、五木寛之訳、集英社)                    |
| ○佳作        | 2名 |    |    |    |  |
| 人文学部社会学科3年 |    | わた | な  | く  | み  |
|            |    | 渡  | 邊  | 久  | 美  |
|            |    |    |    |    | (初)  |
|            |    |    |    |    | 『13階段』<br>(高野和明著、講談社)                                  |
| 人文学部社会学科4年 |    | なか | や  | た  | ひ  |
|            |    | 中  | 矢  | 貴  | 久  |
|            |    |    |    |    | (2)  |
|            |    |    |    |    | 『ベストフレンドベストカップル～愛をもっと強くする心理学～』<br>(ジョン・グレイ著、大島渚訳、三笠書房) |

注) かつこ内の数字は受賞回数です。

## Contents

- ・第4回松山大学図書館報書評について・・・・・・・・人文学部助教授 大内裕和・・・・・・P2
- ・講評の書き方・・・・・・・・経営学部助教授 荻谷寿夫・・・・・・P3
- ・入賞作品の講評について・・・・・・・・経済学部助教授 松井名津・・・・・・P4
- ・・・・・・・・人文学部講師 寺嶋健史・・・・・・P5
- ・私が薦めるこの一冊・・・・・・・・経済学部助教授 馬 紅梅・・・・・・P6
- ・・・・・・・・法学部講師 倉澤生雄・・・・・・P7
- ・統計データで見る松山市大学図書館・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・P8

## 第4回松山大学図書館書評賞について

人文学部助教授 大内 裕和

松山大学図書館書評賞4年目の今回、応募総数はこれまでの3回を大幅に上回る102作品に達した。4回目にして図書館書評賞の裾野が大きく広がったことを心より喜びたい。これは松山大学図書館書評賞というものが、学内で多くの教員と学生に認知されるようになってきたことを示している。これだけ応募作が増えるということは、審査委員にとってはかなりの負担になる。しかしそれは「嬉しい悲鳴」であることは間違いない。こうしたことが積み重ねられることによって、松山大学に書評文化というものが育っていくことを強く期待したい。

ただし今回は新たな問題も生じたといえる。裾野は大きく広がったが、書評ではなく感想文としか言えない応募作がかなりあったことである。前回までは応募作が増えると同時に、感想文とは異なる書評作品が増えるという量と質双方において良い傾向が続いていた。しかし今回、応募総数は大きく増加したものの、書評とは呼べない内容やレベルの応募作がかなり見られた。応募作が多かったにも関わらず、受賞作が5点にとどまったということはそのことを反映している。次回応募される皆さんは、まずは書評＝「本の内容を適切に紹介し、批評すること」という基本を忘れないようにしていただきたい。さらにこれまでの受賞作品や審査委員の講評などを参考にすると良いだろう。

今回の応募作を読んで改めて感じたのは、書評というのは読解力や文章力と同時に「どのような本を選ぶのか」によって大きく規定されているということである。専門的過ぎる本を選んでしまった結果、評者が内容を十分に理解することができず、優れた書評にならなかった応募作がいくつかあった。さらに今回多かったのが、ベストセラーなど「読みやすい」本を選ぶ傾向である。これらの本は理解することは容易であるが、その内容が貧弱であるために読解力や文章力を十分に生かすことができず、高い評価を得なかった応募作がかなりあった。本の内容が貧弱過ぎると、たとえ1200字以内の書評であっても十分な論の展開はできない。やはり評するに値する本を選ぶべきである。松山大学図書館書評賞は、松山大学図書館所蔵であればどの本を選んで書評しても自

由ということになっている。しかしこの「自由」が曲者である。この「自由」をうまく生かすことができず、本の選択を誤ってしまうと受賞することはとても難しい。どのような本を選ぶかが「腕の見せどころ」である。今回の応募作を見る限り、読みやすい本を選ぶという安易な方向は禁物だといえるだろう。ぜひ書評する本選びに意識的になってほしい。

しかし受賞した5作品はこれまでの受賞作のレベルに劣らない、優れた書評であったといえる。特に最優秀書評賞をとった『イラクの中心でバカとさげふ』の書評は、内容理解の深さ、文章のテンポのよさ、効果的な言葉の使い方などの点でとても優れた作品であるといえる。受賞した塩田明人さんは2年連続の最優秀書評賞（松山大学図書館書評賞で初）であり、その快挙をたたえたい。塩田さんにはこの文章力や言葉のセンスを生かし、さらに深めていくための努力を期待したい。この最優秀書評賞をはじめ、優秀書評賞、佳作の受賞5作品はいずれも書評として一定以上の高いレベルに達している。次回応募しようとする学生は今回受賞した5作品を参考にし、さらにそれを超える水準の書評を目指してほしい。

次回は今回の応募作の増加という裾野の広がりに加えて、書評としての質が全体として向上することを願ってやまない。本の選び方や書評の書き方などがわからない学生は、教員のアドバイスを積極的に受けるのも良いだろう。多くの学生の応募を心から期待している。



# 書評の書き方（私案）

経営学部助教授 荻谷 寿夫

初めて書評選考に立ち会った者から、応募作の多くが抱える2つの問題点について指摘する。まず書評と感想文との区別がついていない。つぎに文章としての体裁が整っていない。以下ではその2点について、どのように書けばいいのかについての私案を提示する。

## 評価の正当性を主張する

書評とは書物に対する評価である。それは一方では、書評者はなぜその書物を選んだのか、その書物を評価するポイントは押さえるべき点を踏まえているか、評価は妥当であるかなどといった点から、書評の読者によって評価される。書評者にとって、画期的なテーマや表現手法と思われた書物が、書評読者にとってはありふれたテーマや表現手法でしかない場合は、書評者の読書量の少なさが批判されることになる。

書評とは、書評者がその書物を評価するポイントを指摘し、その理由を述べた文章である。評価するポイントにはいくつかある。例えば、他にはない独自のテーマを扱っている。いままでにないデータに基づいている。独自の分析手法を使用している。通説に反する結論を導き出している。独創的な表現手法を用いている。これらに共通することは、他の書物との違いを打ち出している点である。その違いを指摘し、その違いの意義を論じることが書評である。

書評者が面白いと思う本が、他のひとにとって面白いとは限らない。独創的であると書評者が思う本が、他のひとにとってはありふれたテーマ、ありふれた表現手法ととらえられる場合がある。評価する者は、その評価が正当であることを理由づけなければならない。この部分が書評で一番重要である。

書物の著者は、自分のテーマを読者に訴えようと執筆している。そのため批評する意識を持たないまま読んでしまうと、本に読まれてしまう場合がある。書評賞の応募作にも「感動しました」「面白かった」で終わっている作品が多数あった。書評は、読者をどうやって感動や面白がらせているのか、その物語の構造や表現手法を分析しなければならない。一読者として感動するのも面白いのも自由であるが、書評の執筆者としては読者の立場を離れたところから評価しなければならない。本に読まれてしまった書評は書評ではなく、単なる感想文である。

## 評論文としての形式を守る

評論文としての形式が守られていないため、内容の評価以前に審査で脱落する応募作が多数あった。評論文としての形式は、小説よりも厳しいルールに則っている。まずは、段落の始めは一文字下げる。では段落は何のためにあるのか。段落とは一つの主張の単位である。例えば書評が、序論、本論、結論の3つの部分に分かれている場合は、段落は最低3つにわけなければならない。本論部分において複数の主張するポイントがあるならば、本論部分は複数の段落にわけなければならない。書評賞の文字数制限を考慮すると、主張するポイントは多すぎるとその根拠を示せなくなる。

次に文末の処理である。敬体（です。ます。）と常体（だ。である。）が混在する文章は、文章書きとしての最低限の作法すら守れていないことを示している。文末の揺らぎは執筆者の主張の揺らぎとも受け取られかねない。それは書評としては大きなマイナスである。書評にしても論文にしても、文末は常体である。加えて、文末に「と思う」と書くことは蛇足である。書評者の主張の部分については、すべて書評者の思っていることが書かれていることは自明である。

最後に今回審査を担当していて、非常に気になった表記が三点リーダー（…）である。三点リーダーは2つセットで利用するというルールが守られていない。それ以前に、なぜ三点リーダーを使うのかという必然性がわからない書評ばかりであった。三点リーダーは、目次や索引などで文字と文字との間隔を埋めるためにつかわれる他には、省略記号として使われる。書評において、書評者の主張の部分で三点リーダーが用いられるということは、書評者は主張を省略していると表現している。主張を省略している書評を読む必要はない。書評は文学作品ではなく、あくまでも批評・評論の文章なのである。自らの主張を省略し、読み手にそれを推察させるような文章は、審査の対象になりえない。また、疑問符（？）やエクスクライメーションマーク（！）は、日本語の表記として用いることに対しては議論が分かれる点であり、小説やエッセイならともかく評論では用いるべきではない。

# 入賞作品の講評について

経済学部助教授 松井 名津

## ●塩田君

塩田明人：最優秀書評賞、橋田信介著

「戦場のカメラマンが書いた

イラクの中心で、バカとさけぶ」(アスコム)

印象的な導入部、リズムのある文章を武器に昨年に続いて二度目の受賞を果たした作品である。昨年の作品に比べて進歩が感じられるのが対象に切り込む早さと深さである。とはいえ性急に内容紹介に進まないところが塩田さんらしいところともいえよう。タイトルから始まって、本の中身からはみ出し情報というべき関連本の紹介と、一冊の本を味わい尽くす紹介となっている。この書評を読めば橋田氏の本だけではなくイラク戦争をめぐる写真ジャーナリズムの本に手を伸ばしたくなるだろう。

さて二年連続だからこそあえて厳しいコメントも付けておきたい。まず第二パラグラフの冒頭の文章だが、「著者が部下と呼ぶ新進気鋭のカメラマン、宮島茂樹氏とその戦友と言われる勝谷誠彦氏」となっているが、これは「新進気鋭のカメラマン宮島茂樹氏と、その戦友といわれる」とすべきだろう。読点の付け方は筆者の個性といえる文体に関わるので、すべてを一義的にミスとはいえないが、この場合は読み手を惑わせる可能性が大きい。書評全体が勢いで書いていると思わせるところがあり、それが活きの良さを生む反面、話し言葉なら違和感のない読点リズムも、書き言葉となるとちょっと小首をかしげる点もなきにしもあらずである。私が個人的に引かなかったのは第3パラグラフの「鈴木幸男氏(通称ユキオちゃん)と、あの手この手で破り、爆弾の雨を」のところと、「戦場という、生死の狭間を行き交うフィールド」のところである。特に前者は文章の順番を入れ替えればより読みやすい表現になったのではないかと思う。また「言われる」という表記は実際に口に出して言う場合に限らなくてはならない(最後のパラグラフの「私たちの言う日常」も同様のミスである)。

さらに今後さらなるレベルアップを目指すための注文を付けておきたい。昨年度や今年度のような文体だけでなくさまざまな文体にチャレンジしてほしい。あるいは、この文体のまま高度に専門的な書物の書評にチャレンジしてほしい。確かに、今の塩田さんの文体と書評対象の書籍との相性は非常によく、この文体でこのような対象を描く限り破綻はあまり生じないだろう(ファインチューニングは必要だろうが)。だからこそ異分野や異なった文体にチャレンジして幅を広げてほしいと思う。

最後に塩田さんの文体にならって受賞をねらおうと虎視眈々としている学生諸君へ。一見まねしやすそうな文体にだまされてはいけない。話し言葉を書き言葉にうつす際の独特の間を身につけるのは至難の業だ。下手なマネは墓穴を掘るもとである。オーソドックスに書き言葉の王道を身につけるのが受賞作への早道である。

## ●山田さん

山田みゆき：優秀書評賞、ブルック・ニューマン著

五木寛之訳「リトルターン」(集英社)

一読するとあまりの素直さになぜこれが優秀作品なのだろうという疑問を持つ人もいるだろう。感想文じゃないのかという異論も出そう。ただちょっと待ってほしい。感想文と書評を分けるポイントになるなぜこの本を紹介するのかその理由を明確にするという点を頭に置いて、もう一度この作品を読み直そう。山田さんはこの点をうまく、そして奇をてらわずクリアしている。

なぜ「うまく」クリアしていると評するのかといえば、それはこの本が寓話だからだ。寓話はたとえ話であるだけに、どんなメッセージをくみ取るかは人それぞれだし、同じ人が読んでも時に応じて受け取るメッセージが違ってくるだろう。そもそも何を寓意しているのか(何の例えなのか)が明確であるとは限らない。これは寓話に限らず上出来の童話にも当てはまる。だから評価理由を明確にすることが難しい。寓話や童話は書評するにはもっとも困難なたぐいの本なのである。山田さんはその困難さを、自分の感じた読後の「気分」を分析してみせることによってクリアした。これがうまい理由である。もし読後の気分で終わっていたなら、書評ではなく感想文にとどまっただろう。自分が感じた気分や感情に没入することなく、一歩引き下がって客観化する(分析する)ことができるかどうかが書評か感想文かを決めるのである。さらに本文と挿絵の魅力を「風穴」「羽ばたく」「涼しい風」といった縁語(お互いに繋がりのある言葉)で結ぶことで、本文と挿絵がそろって一つの本になっているというこの作品の独自性をうまく描き出している。

次に「奇をてらわない」という点を説明しておこう。寓話や童話に関して、その秘められたメッセージを読み解く案内本やテキスト批評が山とある。知識をひけらかしたければ、そのどれか一冊を手にとって要約するという手もある。そこまでしなくてもどこかで耳にした(目にした)議論を援用して寓話を論じることは結構簡単だ。それをあえて避けたとまではいわないが、ネット上ですでに乱れ飛んでいる哲学的問答や人生訓にひかれることなく、取り立てて悩みも挫折の経験もない自分自身と、内面が壊れてしまったリトルターンとを正面からぶつかり合わせていることによって、山田さん自身の書評にしているといえるだろう。そこが他の作品を退けて優秀賞を受賞した理由でもある。

しかしその点でいえば、最後のパラグラフはいただけない。これではリトルターンの本についていた腰巻きの文章を少し長めに書いただけにすぎない。せっかく「漠然とした毎日を生き」「漠然と不安を覚えていた」自分にとって「一生の一冊」と主張したのに、大切な人が落ち込んでいたり悩んでいたりするときに贈る本としてしまうと、悩みの対処本になってしまう。

## ●山下さん

山下さやか：優秀書評賞、重松 清著「ビタミンF」（新潮社）

山下さんの作品は構成上破綻の少ない書評といえよう。表紙や題名といった第一印象から、内容紹介、そしてこの本自体がどのような意味を持つのかという評価の部分と、オーソドックスな構成を取っている。書評をどう書けばいいのかよくわからないという人は、ひとまずこの構成に沿って文章を書いていくことを考えよう。受賞する作品になるかどうかは、中身次第であるのはもちろんだが、書評の必要要素を満たさないのでは話にならない（必須アミノ酸をとらずにビタミンだけ補っても駄目なのだよ）。

オーソドックスさの中できらりと光るのが第3パラグラフの「しかし目の間にある現実是不変」という作品世界と「本を読んだからといって魔法のように現実が変わるわけではない」こととを結びつけた点だろう。近頃は「癒し」ブームや「自己改革」ブームらしく、今年の応募作にはこの本を読んで人生が変わったとか、そこまで大げさではなくとも、日頃の態度を改めようと思ったという「感想」が続出していた。そして実際に本屋に行

けば「あなたの人生を変えるこの一冊」「この本で泣きました」というフレーズがこれまた続出する。こうした安易な風潮から脱しているという点が評価されたといえる。

それだけにこの最後のパラグラフを書いた後で、もう一度書評全体を書き直してほしかった。他の作品は一行に満たない紹介に終わってしまっているのに、「ゲンコツ」をこれほど長々と紹介する必要があったのだろうか。最後の部分を読み手に納得させるために、作品内容をどこまでどのように紹介すればよいかを念頭に置いて、もう一度再構成すれば、一段と優れた書評になったはずである。さらに書評の質を高めるためには、心境が変化するきっかけが作られたけれども、それで現実が変わるわけではないこと、にもかかわらず不器用な主人公に励まされること、この二つのもすれば矛盾しそうな事柄の間を明確にしてほしい。最後の文章を読むと、そこが書評対象作品が『ビタミンF』である意味だと山下さんは考えていると思われる。ここが書評の中心部分となるべきはずなのに、書き込まれずに終わってしまったのが何とも惜しまれる。

人文学部講師 寺嶋 健史

## ●渡邊さん

渡邊久美：佳作、高野和明著「13 階段」（講談社）

ニュースや新聞で犯罪が報じられないことの無い昨今ならではの選書である。本書のテーマである死刑制度と法の在り方など深い問題に、疑問を投げかけて考えてなければならぬという書評者の思いが伝わる作品である。法律用語や難解な表現を使うことなく、わかりやすく論じられている。

この物語の後半では思わぬどんでん返しが展開されるのであるが、その点にはあえて触れず、要点だけをうまく取り上げて無駄なく簡潔にまとめられているので、実際に読んでみたいという気にさせる効果につながっている。

気になる点をいくつか指摘すると、まず2行目で改行する必然性がそれほど感じられない。そして第4段落中にある「人はなぜ生まれるのか～なぜ殺し合うのか…」のくだりが、その前後の流れおよび本書のストーリーとの関連性がわかりにくく、唐突な感じがする。また、本書で取り上げられている、人が人を裁くことの正当性や刑事事件における加害者と被害者との関係について、少し踏み込んで個人的な見解を織り混ぜると、さらに書評としての深みが増したのではないかと思う。

この本を一読してから再度この書評を読み返してみると、死刑の賛否や法律は正しいのか、命や犯についての重みや軽率さ等に視点を向けた真摯な作品であることがわかる。

## ●中矢君

中矢貴久：佳作、ジョン・グレイ著、大島 渚訳

「ベストフレンド・ベストカップル」（三笠書房）

『ベストフレンド・ベストカップル』というタイトルから恋愛バイブルと思われる本書を選んだこと、そして堅物そうな大島渚が若者の恋愛指南書を翻訳していることに注目した点が、いかにも若者らしくユニークで新鮮である。書評というと改まって難しいものに一般的に思われがちであるが、こういう取り上げ方であってもよいのではないだろうか。

「目からウロコ」、「うーむ、なるほど」といった表現を交えることで、まるで中矢君が話しかけている姿が目浮かぶようである。読み手は思わず身を乗り出して一気に最後まで読んでしまいたくなる、実にほほえましい作品である。ただ、このような語り口調が多い書評に対しては、多少賛否があるかもしれない。

本書が単なる「恋愛 how to モノ」ではなく、男女関係や人間関係を円滑にするための真面目な実用案内書としても役立つことを、ユーモアを交えながら実にわかりやすく紹介している。また、単に本の内容の紹介だけに終わらず、さらにそれを書評者が自ら実践してみた旨を述べていることが、この作品を魅力的で説得力あるものにしている。

この作品で1つ惜しまれるのは、本書を肯定的な面だけでなく、否定的な面からも論じてあればもっと魅力的な書評になっていただろう、ということである。

大切なパートナーとのすばらしい愛と思いやりを育まれんことを。

# 私が薦めるこの一冊

経済学部助教授 馬 紅梅

## 中国の衝撃

溝口 雄三 著

請求記号：222.07/Mi  
配架場所：開架（2階）



わたしが『中国の衝撃』を手にとったのは、2005年4月に日中関係を根底から揺るがすような激しい反日デモが中国の各地で繰り広げられ、その映像がお茶の間に流されて、中国が目に見える形での衝撃になった、ちょうどそのときである。日中両国の友好を願う多くの人の胸を痛める事態であった。事態は沈静化の方向に向かいつつも、根本的解決が図られたわけではなく、いつ再発してもおかしくないのが現状である。

この反日デモの原因についても、中国が抱える難問の数々、例えば、貧富の格差、政府への不満のガス抜き、愛国主義教育、共産党指導部の権力闘争等があげられている。だからといって、デモの背景に真の反日感情が存在しなかった、とは私は思わない。日中双方の言い分は噛み合わず、「嫌中、反中感情」と「嫌日、反日感情」が増幅していくという悪循環に陥っている。論争点についての是非を論じることは私の力の及ぶところではないが、本書によって、日中間に横たわる齟齬の将来的な解決の方向性と根深い反日感情の背景を理解するための新しい視野を得ることが出来たと言える。

著者は、1997年から2003年まで、日中の知識文化人で構成する「日中・知の共同体」で、狭い国益や自国の論理に囚われず、広い視野から忌憚りの無い意見を交わしてきた。そこで知見したことに基づいて、かつては明治以来、日本の近代化を促進させた「西洋の衝撃」に代わってこの「中国の衝撃」をもって、「脱亜入欧」の歴史的認識から覚醒することを迫っている。

著者は「十六世紀から二十一世紀の現在にいたる日中関係、東アジア関係をどのような歴史の目で捉えるか」という視点で歴史を分析し、西欧化をいち早く成し遂げた優者・日本と、それに遅れをとった劣者・中国という考え方に、日中双方が囚われてきた、と指摘している。日本側の優越意識と中国側の鬱屈と苛立ち、このような感情的葛藤が歴史認識に潜在していることが自覚されていないゆえに、今日になって日本側の優越意識と表裏一体となっている日本のナショナリズムと、中国の経済的台頭とともに膨張してきた中国のナショナリズムがぶつかりあっている、というのである。国の近代化と経済発展を考える場合、日本＝優者＝先進、中国＝劣者＝後進と言う構図から脱却しない限り、日中間の齟齬はますます大きくなる。この優劣の歴史観から目覚め、多元的な歴史観をもつことが必須であることを認識させてくれたのが、『中国の衝撃』なのである。

著者は近代過程を先進・後進の図式で描いてきた西洋中心主義的な歴史観の見直しの必要性を唱え、今後更に関係が深まるがゆえに、より一層激化するであろう両国間の矛盾や衝突を防ぐために、「日中知の共同体」の構築を呼びかけている。歴史を相対化できたとき、はじめてアジアという自由の、共通の場に立つことができるからだ。

本著に収められた各論文は文章として短い、濃密に書かれており、しかも通説と異なる視覚から分析されているから、精読が必要である。

日中間の問題は複雑で入りこんでいる。新聞やテレビの説明・分析はわかりやすさを求めるために、多くの実態が隠蔽されていることを心しておく必要がある。図書館報34号の「私が薦めるこの一冊」に吉田健三先生の『エコノミストは信用できるか』が紹介されているが、今私たちは「歴史家は信用できるか」と問わなければならない。本著の最後に「歴史叙述の意図と客観性」という文章が付けられており、E. H. カーの『歴史とは何か』と合わせて読むことをお薦めする。

真の友好を目指して構築すべき日中関係に関するさまざまな言論がある中で、日中の「知」の交流と相互の国の歴史的事実と経過を踏まえた本書は、私にとってまさに「干天の慈雨」であった。それだけに大勢の人に虚心坦懐にこの書を読んでほしいと願うのである。

## 消費者金融 実態と救済

宇都宮健児 著

請求記号：081/13/779

配架場所：開架（2階）



こんな光景、目にしたことはないだろうか。電車を降りて駅の改札を出ると、目の前に1階から上層階のすべてに、消費者金融のテナントが入っているビル。ドライブの最中、「えっ。こんなところに作って大丈夫なの?」という、突如現れる無人契約機の入っている建物。夜、ニュースを見ていると、「ご利用は計画的に」、「無理しないでね」などと複数の会社が競い合うように流しているテレビCM。野球や、スポーツ大会のスポンサーとして看板に掲げられている消費者金融の広告。クレジットカードの明細と一緒に送られてくる、クレジットカード会社による各種キャッシングのキャンペーンの案内等々。

この本は、これら日々当たり前目にしている消費者金融、クレジットカードのキャッシングから、まだ、関わったことがなくても聞いたことはあるであろうヤミ金融、商工ローンにいたるまでの金融機関の実態、なぜ、これらの金融機関がこんなに勢いづいているのかという背景、これらの金融機関から借金を重ね、多重債務を抱え返済できなくなった場合の救済方法について記しているものである。

著者は、クレジット・サラ金問題対策協議会の役職を務め、最近ではヤミ金や振り込み詐欺に対して一斉告発を行なっている弁護士であり、その道の第一人者である。私が大学生の時代に、すでに消費者金融による多重債務問題が数多く起こっており、そのときに精力的に活躍していた弁護士であった。最近では、貸金業の世界で、その知名度の高さ故に著者の名前を語り、救いを求める多重債務者を狙った振り込み詐欺まで行なわれてしまうほどの人物なのである。

本書が刊行されたのは2002年4月なので、現在では若干の法改正がなされたり、文献中に挙げられている資料もやや古いところがある。しかし、著者が指摘する基本的な問題は現在でもそのまま残されている。本書で述べられている問題点をいくつか拾ってみたい。第一の問題は、消費者金融のイメージが美しく描かれ、その実態が知られていないことである。テレビCMでは、制服を着た若い女性のオペレーターがハキハキと相談を受けている場面などが描かれている。

しかし、どのような人が対応しようと借金は借金である。この借金には、後述するが違法な利息を加えて返済しなければならない。そしてその返済には血も涙もない。返済にあたって何が行なわれているのか、リアルな場面が本書では述べられている。消費者金融から借金をしたり、クレジットカードでキャッシングするということは、怖いことなのだよ!是非、皆さんの肝に銘じておいてほしい。

第二に、金融機関のあり方の問題である。そもそも銀行が国民のニーズに応じて低金利の融資を行なっていれば、消費者金融が発生する基盤はなかったのである。日本の銀行は、このような融資には極めて消極的であった。ドイツ及びフランスにおいては、消費者金融は銀行によって行なわれているということである。その一方で、銀行は消費者金融に対しては低利で大量の貸付資金を供給し続けている。言い方は悪いが、銀行は自ら危険をかぶることなく、儲けを手にする術として消費者金融を位置づけているのである。最近の某消費者金融のテレビCMを見てみると、大手都市銀行と消費者金融が提携していることがわかる。このような状況について、銀行の窓口に行き行って融資の相談をした時に、担保のある優良な顧客には銀行が直接融資を行い、担保のない危険な顧客は消費者金融に回して、高金利で融資を行なうものと囁かれているのだ。

第三の問題点は貸金業をめぐる法制度の不備である。貸金業が登録制になっているため、4万円ほどの手数料を支払えば、誰でも貸金業者になれてしまうこと。そして、最大の問題点は、「出資の受入れ、預り金及び金利等の取締りに関する法律（出資法）」と「利息制限法」の定める利息の上限に関する規定がずれていることである。利息制限法では、貸出金利について元本10万円未満ならば年20%を最高利率として定めている。したがって、それ以上の利息を課すことは違法になる（是非、皆さんの持っているクレジットカードの利率、テレビCMで表示される利率を確認してほしい）。実際には、ほとんどは20%以上の利率で貸付けている。これは、利息制限法には罰則規定がないため、まず遵守されないのである。遵法精神が金銭的な利益を目の前にすると、いかにもろいものであるか!一方、出資法では年29.2%を超えると、懲役、罰金という刑罰が課される。したがって、消費者金融、クレジットカード会社は、年29.2%以下で貸付を行なっているのである（ヤミ金融は、これ以上の利率で貸付けている）。著者はこれらの規定のずれに対して、出資法の利率を下げることを提起している。

以上、いくつか問題点を拾ってきたが、本書は、消費者金融を切り口にして、金融業のありかた、金融行政のあり方、マスコミの報道の仕方、消費者教育のあり方と日本の現状を広く問うている良書である。同時に、借金で困っている時の対処の仕方まで書いてある実践的に役立つ書物である。借金をする前に、借金で困っている人が身近にいたら、必ず読んでおいてほしい。

## —— 統計データで見る松山大学図書館 ——

### 図書館利用状況推移表

※貸出冊数は研究室分を除く

年度	入館者数	貸出総冊数	貸出冊数(学部別)					学生数
			経 済	経 営	人文英語	人文社会	法	
2001年度	222,166	55,394	10,267	10,978	4,932	9,382	6,415	6,410
2002年度	230,233	58,482	11,175	11,200	4,713	7,631	6,647	6,184
2003年度	216,074	54,429	9,928	10,776	4,882	7,374	6,075	5,997
2004年度	203,977	44,321	7,248	9,418	4,848	5,696	4,884	5,730

### 『相互協力』利用件数推移表

	本学からの申し込み件数			他館からの受付件数			合 計
	文献複写	相互貸借	所蔵調査	文献複写	相互貸借	所蔵調査	
2000年度	363 41	140 15	2	451 35	39 8	9	1,004
2001年度	268 23	177 13	3	499 51	52 9	12	1,011
2002年度	493 92	230 40	4	829 90	52 12	27	1,635
2003年度	589 99	312 63	16	723 73	52 23	8	1,700
2004年度	419 61	146 6	6	1,323 156	98 26	11	2,003

\* 下段は謝絶の件数  
 1999年9月より NACSIS-ILL を開始した。

### 『編集後記』

第35号は、「第4回図書館書評賞」特集です。図書館としては、回を重ねるごとに先ずは応募数が前年度を下回らないで欲しいとの思いがありますが、第4回は前年度を倍増する102の応募数はうれしい限りです。

世界を代表する自動車会社トヨタが、原価を2分の1にすることを目標に、改善を重ねた過程が『トヨタ式改善力』(若松義人・近藤哲夫著・ダイヤモンド社)に描かれていて、このトヨタの「改善」方式は「KAIZEN」というローマ字で世界的なターム(専門用語)になっているそうです。

第4回図書館書評賞のうれしい誤算は、次回への課題も残しましたので、「カイゼン」していくことでより充実していきたいものです。また、図書館をとりまく様々な問題も、身近な「改善」を繰り返すことで、より良き図書館を目指します。

松山大学図書館報 No.35 2005年5月31日発行

編集・発行 松山大学図書館

〒790-8578 松山市文京町4番地2 TEL(089)925-7111(代)

ホームページアドレス <http://www.matsuyama-u.ac.jp>

E-mail: [mu-libs@matsuyama-u.jp](mailto:mu-libs@matsuyama-u.jp)